

編集後記

『JunCture』もついに10号である。「日本近現代文化研究センター」(2008年発足)の機関誌として出発して10年、センターは「[アジアの中の日本文化]研究センター」(2013年発足)へ、そして「超域文化社会センター」へと改称発展してきたが、機関誌は『JunCture』という名称を受け継ぎ、読者のみなさんに継続的に読んでいただくことを大切にしてきた。日本文化からアジアへさらに超域へとセンターの活動の視野を広げてきたが、地域についても研究領域についても超域的かつ交差的な思考を目指すという根本的な姿勢は、当初からのものだ。「JunCture」という、ときに不穏さも潜在させた結節点として、これからも問題提起的な雑誌を目指して行きたい。

今号は、「超域文化社会センター」としては最初の号ということになる。特集では「ジェンダーズ」と題して、「ジェンダー」という概念が前提としてきたバイナリな枠組みの再検討を目論んだ。文化と社会に対する批評性に富んだ、たいへん刺激的な論文を掲載することができたと思う。寄稿してくださった執筆者のみなさんに心より感謝を申し上げる。また、投稿論文については、学外から多くの投稿があったことを報告しておきたい。『JunCture』には、投稿資格を設けていない。これからも、志を共有する研究者のみなさんの、熱意あふれる論考の発表の場となり得よう願っている。レビューには、本センター主催および共催のシンポジウムの参加記に加え、四つの美術展・展示に関する論考を掲載することができた。ご寄稿に感謝する。

10号からの大きな変更点として、デジタル化しオンラインで刊行することとした。紙媒体も、装幀を変更したうえで少数作成するが、今後はオンライン刊行を主としていく。特徴のある装幀が『JunCture』の個性となっていたので残念ではあるが、これまで以上に多くの読者に届けることができるのではないかと期待している。

デザインは、引き続き金武智子さんにお願いした。いつもながら、特集の企図をヴィジュアルに表現していただけたことは有り難く、またデジタル化した際の読みやすさと既刊との連続性についてご配慮いただいた。英語のネイティブ・チェックはトーマス・カバラさん、校正作業はセンターRAの澤茂仁さんと市川遥さんにお願いした。今号はとくにぎりぎりの作業となってしまったが、みなさんのご協力があつて、無事に刊行が叶った。感謝申しあげる。

最後に読者のみなさん、「超域文化社会センター」機関誌として、あらためて『JunCture』にご支援賜りたく、なにとぞよろしくごお願い申し上げます。

(飯田祐子)